

新井 康通

慶應義塾大学医学部老年内科 助教

超王礼者の QOL に寄与する要因の包括的検討と地域比較

目的：長寿社会を迎えつつある今日、Quality of life (以下 QOL と略す) の高い健康長寿の達成が個人レベルでも社会レベルでも強く望まれている。本研究では都心部と農村地区を比較することにより個人的要因 (健康、自立度など) と環境要因が高齢者の QOL に与える影響を明らかにすることを目的とした。**方法：**対象は住民基本台帳から無作為抽出した都心部在住の 85 歳以上の高齢者 129 名、および農村地区の住民調査に参加した 85 歳以上の 49 名とした。高齢者の QOL の指標として精神的健康度 (WHO5)、認知機能 (MMSE)、ADL (Barthel index) を測定した。農村地区では認知機能を HDS-R、ADL を老研式活動能力指標で測定した。両地域で身体機能の指標として握力を、都心部では血液生化学検査も行った。**結果：**都心部においても農村地区においても精神的健康度は ADL と有意な相関を認めた。都心部では女性の、農村地区では男性の独居率が高く、子供などの家族との同居率は男女とも農村地区の方が高かった。都心部の独居男性で精神的健康度が高い傾向を認める以外は、居住形態は QOL 指標と関連がなかった。重回帰分析では血清シスタチン C 濃度、ADL が都心部参加者の精神的健康度に有意に関連した。**結語：**都心部と農村地区では居住形態は大きく異なっていたが、共通して ADL の維持が 85 歳以上の高齢者の QOL に重要であった。また、血清シスタチン C 濃度が高齢者の QOL と関連しており、慢性腎臓病が QOL の阻害要因である可能性が考えられた。